

PHYSIOLOGICAL 2008 Nagoya, Aichi October 17-18, 2008

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17315

『学会見聞記』

第55回中部日本生理学会大会 に参加して PHYSIOLOGICAL 2008 Nagoya, Aichi October 17-18, 2008

齊 藤 光

金沢大学大学院医学系研究科医科学専攻
脳情報分子学 修士課程2年

2008年10月17日から2日間、経済発展の著しい名古屋にて愛知医科大学を当番校として開催された第55回中部日本生理学会大会に参加する機会を頂きました。時間の都合上残念ながら2日間通して全ての参加は叶いませんでしたが、一端をご紹介出来ればと思います。

ヒトゲノムのドラフト解析が終了し、すべてが塩基配列で説明されるとの思いこみが蔓延した時期は一時で終わり、分子から生体に至る広い分野をカバーし、システムとしての生物を対象とする学問としての生理学がふたたび注目される昨今、日本生理学会は80年を超える歴史を通じて生命の基本的な機能とその仕組みに関する膨大な知見を蓄積し、国内外を通じて基礎医学領域の発展のみならず、疾患の理解・治療・予防にも広く貢献しています。今大会はその日本生理学会の中部支部大会ということもありポスターを含めた総演題数51題、参加人数およそ200人という規模ですが、特に若手の研究活動を励まそうというコンセプトの下に開催されました。これまでの伝統の上に立ちながら、生命を理解し、日々蓄積されてきた新たな知見を分かち合い、関連学会との連携も深めていこうというわけです。また今春既に開催された第85回日本生理学会大会と同様に、2009年8月京都での開催が決まっている第36回国際生理科学会議大会へのスプリングボードとしての位置付けでもありました。

金沢から電車で3時間、名古屋に降り立った私は思わず見上げました。名古屋駅前の高層ビル群に居場所を奪われた空はとても小さいながらも、しかし逆にそれが自身の青さを強烈に主張しているのがとても印象的でした。清々しい気持ちが背中を押し、地下鉄へと乗り換えて会場へと歩を進めます。学会会場である愛知医科大学は名古屋郊外にあり、喧騒とは無縁といった好立地でした。大学の敷地の目前には池などもあり、学生や研究者の方々が憩う姿なども見ることが出来、学業また研究活動に打ち込む場所として文句の付け様がないと感じました。

私自身は「ドパミン細胞欠如網膜ゼブラフィッシュの行動解析」と題してポスター発表を行いました。まだまだ穴の多い研究報告でしたが、見えた方からの非常に有益な御指摘御意見により、今後の研究活動をより充実したものとしようという意気込みが湧く貴重な時間とすることが出来ました。また興味を持

って私のポスターに足を運んで下さった方々の中には私同様に魚類の行動を扱う研究者の方がおられ、その独特の苦労話なども交えつつ意見交換を行うことができました。

口頭発表も細胞、個体、社会レベルに至るまであらゆる発表が行われ、活発な議論がなされていました。特に印象に残った講演は、富山大学大学院の浦川将先生による、注意共有過程におけるアイコンタクトの効果についての講演です。これは他者とのアイコンタクトが、共有注意課題に与える影響およびその神経機構を明らかにするため、視線追従課題中の脳血行動態(Oxy-Hb, Deoxy-Hb, Total-Hb)をNIRS(近赤外分光法)により解析するとともに行動反応と比較解析したという内容で、神経系を主として対象としている研究室に所属する私には聞きなれない異分野でありながらもとても興味深いものでした。さらに共同研究として、一般企業もその研究に参加していることに驚きました。肉眼では見えないものを可視化させるという技術・製品は、かさむ高額医療費といった社会的背景も後押しして今後益々重要となるであろう予防医療の分野における活躍が期待されます。医師や研究者だけでなく、企業側のこうした成果もより良い未来への一翼を担っていると感じさせられました。そして産・学・官の密な連携とそれぞれの方向性の一致というものの重要性も窺い知ることが出来ました。

意見交換による研究考察の充実化、それによる日々の研究活動への刺激というフィードバック。さらに医療の今後の可能性から、マクロ的視点からの社会における医療というものの位置付けまで、多少垣間見ることが出来た気がします。得るものが沢山有り、非常に有意義な今大会とすることが出来ました。参加の機会を頂いたことに深く感謝致します。

